

古チベット語木簡にみるチベットの古代宗教の諸相

西田 愛

神戸市外国語大学 客員研究員

緒 言

20世紀初頭に敦煌石窟をはじめとしたシルクロードの各地から発見された数万点に及ぶ古文書は、中国語、サンスクリット語、チベット語、ウイグル語（古代トルコ語）など様々な言語で記されており、アジア学にとって20世紀最大の発見と言える。この内、1万点近くにのぼる古チベット語文書（8～10世紀）には、仏典がその大多数を占める一方で、手紙・契約・裁判・医学・占い・九九算表・習字・寺院会計といった当時の社会状況を反映する世俗文書が多数含まれている。仏教文書の大部分がサンスクリット語などからの翻訳であるのに対して、これらの文書はチベット語本来の著作であり、古代チベットについての歴史資料としても言語学的資料としても極めて高い価値を持つ。その中で、報告者の研究対象である古い文書は、骨・サイコロ・銅銭・鳥の声による占いなどその種類や内容は実に多様で、チベットおよび中央アジア古来の民間信仰を知るうえで重要な資料である。またその多様さは、占いが行われていた社会の多様さも反映している。例えば、敦煌出土の銅銭占い文書は、チベット語で記されているにもかかわらず、チベット帝国崩壊後の10世紀に敦煌漢人社会で作成され使用されていた占ト書であったことがわかっている¹⁾。これは、チベット帝国崩壊以降もチベット語が国際共通語（リンガフランカ）として使用されていたとする指摘にも一致する。つまり、古代の文書に記された占いを解明することで、当時の信仰のみならず社会状況についても明らかになると期待できる。

本研究では、中央アジア出土の古チベット語古い文書（8～10世紀）を利用し、チベットの古代宗教の諸相を解明することを目指した。7世紀にチベット史上初の統一国家を築いた古代チベット帝国（吐蕃）では、インド、中国、中央アジアより伝わった仏教は、根本的に相容れない概念および実践をともなうチベットの土着宗教と対面した。後者との数世紀にわたる対立の後、仏教はチベットに定着していくが、それとともに土着宗教は文献

上から姿を消してしまった。両者の対立・拮抗の時期に作成された古チベット語文書は、当時の状況を知る第一次資料である。本研究では、古チベット語古い文書のうち骨占いに関する文献に着目し、その占ト法や記述内要の分析を通して、古代チベットにおける骨占いの実行者や目的、依拠される神格について検討し、チベットの古代宗教の一端を解明することを目的とした。

研究方法

本研究で対象とする古代チベットの骨占いに関する資料には2種類の文献が存在する。第一は古チベット語の記されたト骨であり、第二は、骨占いに関連する内容をもつ木簡である。第一のト骨については、1点の羊の肩甲骨が知られている。これは、1973年に新疆維吾爾自治区博物館を中心に行われた発掘調査によって文字の書かれていない相当数のト骨とともに発見された。出土地はチャルクリク（若羌）県ミールン（米蘭）遺跡のチベット城砦で、Aurel Steinが大量のチベット語木簡を発見したM.I.=Mirān site I (M.I.)にあたる。この遺跡は、チベット帝国がシルクロード南道ロプ地方を統治するために設置した軍事拠点であり、ト骨の年代はチベットがこの地域を統治していた時期、すなわち790年頃から850年頃の間と推定される。なお、報告者は本ト骨に関する研究発表をすでに行っている²⁾。そこで本研究では、関連する木簡7点の記述内要の分析を中心にすすめて、その結果をト骨の研究結果と合わせることで骨占いの具体相を明らかにすることにした。

第二の文献である7点の木簡は、Aurel Steinによってミールン遺跡よりもたらされた大量のチベット語木簡群の中に含まれる文献で、現在は大英図書館に所蔵されている。木簡の全体像については、Thomasの研究によって概観を知ることができる³⁾。これらの木簡は、通常10～15 cm×2 cm前後の大きさで、その両面に5行程程度のチベット語の文面が記されている。まずは、これらの記述内要について、実物調査およびデジタル画像による調

査を行い、正確な校訂テキストとテキストデータベースを作成した。次に、対象文献に特徴的な定型書式を抽出し、各構成要素の分析を行った。その際、難解な語彙や内容については、他ジャンルの木簡も横断的に検証することを通して現段階での解釈とした。

結果と考察

本研究で読解を行った7点の木簡は、記述内容から二分できる。すなわち、占いの問いを記した木簡と、問いと回答を記した木簡である。前者には5点の木簡が、後者には2点が属する。問いを記した木簡には次のような定型書式が見いだせた。

- (1) 「神格名」 *la* (=に) 「奏上人」 *gsol te* (=が奏上する)
- (2) 「肩甲骨の部位」 *la* (=に) 「問い」 (の内容)

上記の書式を手がかりに、木簡の記述内要の読解を進めた結果、次のような内容がよみとれた。まず、古代チベットの骨占いは、占いの実行される地域において影響力をもつ神々 (*yul sman*, *rtse bla*, *rtse sman*, *g. yang*) に依拠して行われていた。これらの神々に占いの問いを奏上するのは、一貫して *Ma snying bzhin bzangs* や、*Bzhan lug bzhin* といった人物であった。個人名としては奇妙なこれらの名は、匿名性を含んだ名であったのかもしれない。彼らは、占いを仮託する神々に対して供物を捧げる役割も担っていたため、神の権威者 (*mnga' thang*) と称されていたことが別の木簡の記述からわかった。神に対して向けられた問いは、命運や健康、結婚、失せものといった占い文献で一般的なプライベートな問いではなく、敵の侵入、収穫、水、食糧、死人など、軍事拠点ミーラーンの統治に関わる公的な内容であった。

特定の人物によって奏上された問いは同時に木簡に記された。第一のグループに分類した5点の木簡がこれに当たる。つづいて、肉を削ぎ落とした羊の肩甲骨の中心箇所に熱した棒状の道具を押し当ててひびを作った。実際に、本研究で対象としたト骨の中心部には熱したために生じたと考えられる破損があり、一緒に発掘された文字のないト骨にも、中心部に数カ所の丸い焦げ跡が見つかっている。こうして生じたひびの形状や長さを吟味することで問いに対する回答を導き出すと考えられるが、問いの内容によって参照されるひびの位置、すなわち骨の左側、右側、中心 (凸部付近) が指定されていたことが、木簡の記述内要から読み取れた。また、回答は簡潔

化された問いとともに木簡に記された。これが第二のグループに分類した2点の木簡である。通常、ト骨自体には文字は記述されなかった。本研究中のト骨に記された文字は、占いの効果や呪力を高めるために記された例外的な記述であると考えられる。

以上が本研究で扱った木簡およびト骨から想定される古代チベットの骨占いの具体像である。古代チベットの軍事拠点では、*yul sman*、*rtse bla*、*rtse sman*、*g. yang* といった土地に関連する一般的な神格名称を用いて、当該地域の土地神に仮託した占いが実施されていた。生活に直接的な影響をもつ敵の侵入や収穫、食糧に関する命運が土地神の管轄内であると考えられていたことがわかる。また、これらの神々に対しては、常時より穀類、酒、野菜、矢、布などの供物をささげる儀礼が執り行われていた。帝国の版図拡大にともない、新たにチベットの領土に編入された各地でも、同様に、現地の土地神に対する供養や、その影響下における占いが実施されていたと考えられる。ここからは、当時のチベット人たちが、新たに進出した各地においてその土地の神々やそれらに対する信仰をチベットの一般名称に置き換えながら受容していった様子うかがえる。その際、神々と関わり、占いを奏上する人物がチベット人であったのか、それとも現地に由来する人物であったのかという疑問が残る。この点については、チベットに組み込まれたスンパやシャンシュンといった異民族の名前を収集し、検証することが必要であろう。本研究で扱った木簡は、古代チベットの生活や信仰に関する具体的な状況を知るうえで大変興味深い資料である。今後は、宗教や儀礼に関連する木簡を中心に解説をすすめて、チベットの古代宗教の研究を深化させたい。

なお、2015年9月にドイツ・ライプツィヒ大学で開催された The 4th International Seminar of Young Tibetologists において本研究の成果を発表した。発表内要は論文にまとめ、2016年12月に出版予定である同学会論文集に掲載される予定である。

要 約

本研究では、西域南道ミーラーン出土の古チベット語木簡の解説と分析を通して、占いが仮託される神々や、占いの執行者、問いの内容、占いの手順といった古代チベットにおける骨占いの具体像が明らかになった。ここで掘り所とされる神々はチベット本土に由来するものではなく、当該地域 (チベット帝国の軍事拠点) の生活を

司る現地の土地神であった。ここに、帝国の支配領域の拡大とそれにとまなう各地の土地神への信仰の実態がうかがえた。今後も引き続き、占いや宗教儀礼関連の文献を中心に分析を進めることにより、チベットの古代宗教を解明する手がかりがつかめる可能性がみえてきた。

謝 辞

本研究の遂行にあたり、公益財団法人三島海雲記念財団より学術研究奨励金の助成を賜りました。奨励金により、研究に必要な書籍の入手、および関連分野の研究会に参加することができました。また研究成果の一部を国際学会で発表し、有益なコメントをいただき論文にまとめることができました。奨励下さった財団関係者の方々、審査を担当下さった諸先生方に深く感謝申し上げます。

ます。また、本研究を遂行するうえで必要不可欠であった、古チベット語木簡に関しては、神戸市外国語大学の武内紹介人教授より貴重な資料とコメントを賜りました。記して感謝申し上げます。

文 献

- 1) A. Nishida: An Old Tibetan Divination with Coins: IOL Tib J 742. In Yoshiro IMAEDA, Matthew KAPSTEIN and Tsuguhito TAKEUCHI (eds.) *New Studies of the Old Tibetan Documents: Philology, History and Religion: Old Tibetan Documents Online Monograph Series*, vol. 3. pp. 315-327, 2011.
- 2) 武内紹介人, 西田愛: チベット語羊骨占文書, 外国学研究, 58, 1-16, 2004.
- 3) F. W. Thomas: *Tibetan Literary Texts and Documents Concerning Chinese Turkestan*, 4 vols., London, Loyal Asiatic Society, 1951.